

当連載では、組合員参加の復興支援活動を紹介します。

No.4

ボランティアは自主的に長く続けていくことが大事 被災地のニーズを聞いて開催 仮設住宅集会所での 「ふれあい喫茶」

みやぎ生協



メンバー（組合員）手作りの保冷剤ケースが配布された。

お茶を飲みながらしゃべり、笑う——。被災地ではそんな日常さえも失われた。避難所から仮設住宅に移っても事情は同じで、むしろプライバシーが確保された分、気軽な行き来がしにくくなっている面もある。

リンゴやイチゴの栽培で有名な宮城県山元町^{やまもとちょう}。国道から少し内陸に入った地区に78世帯が暮らす仮設住宅がある。7月30日、その集会所でみやぎ生協^{せんなん}仙南ボランティアセンター主催の「ふれあい喫茶」が開かれた。

「家にいたら、こうやって笑うことないもんねえ」「仮設は狭いから集まって“お茶っこ飲み”もできない。



思い思いにお茶を飲み、漬物を食べ、おしゃべりする。

みんなとしゃべるのがいいのっしょ」「わたしさっきまで具合悪かったんだけど、来てよかったあ」。明るく、にぎやかで、笑い声が絶えない。

みやぎ生協は、仙台・気仙沼・石巻・岩沼にみやぎ生協・ボランティアセンターの拠点^{※1}を置きボランティア活動に取り組んでいるが、「ふれあい喫茶」は「おゆずり会」^{※2}や「子育てひろば」と並んで人気のメニューだ。

仙南は、山元町^{わたりにちよう}や巨理町など津波被害の大きかったエリアでもある。仙南ボランティアセンター長の

地域代表理事^{※3}・大村美智子^{おむらみちこ}さんは、「地域代表理事やこ〜ぷ委員^{※4}にも身内を亡くしたり、家を流されている人が多い。『自分たちも被災者だけど、仮設に入って落ち着いたので何かやりたい』と言ってくれるんです」と話す。

この日、ボランティアに入ったのは仙南の地域代表理事やこ〜ぷ委員、仙台から応援に駆け付けた地域代表理事など全部で17人。ボランティアをやりたいが、何をしたらいいかわからないと言う人は多い。大村さんは、そうしたメンバー（組合員）の「旗振り役になろう」と思っている。

「6月のボランティア学習会で、阪神・淡路大震災の時も最後は被災者同士でボランティアを続けたという話を聞きました。私たちも誰かに言われてやるんじゃなく、自主的に長く続けていく。そういう活動を広げていきたいです」

（文・写真 早坂恵美）



みやぎ生協ボランティアの皆さん（青のエプロン）。同時に開催された子育てひろばを担当したNPO「子育て応援隊ピンポンパン☆」の皆さん（前列4人）、当日見学に来ていた、ならコープの組合員理事も一緒に。

※1 仙南ボランティアセンターは、岩沼店メンバー集会所を拠点に活動している。

※2 自分では使わないものを持ち寄り、欲しい人に譲る取り組み。

※3 メンバーの中から選ばれる、みやぎ生協の非常勤理事。

※4 みやぎ生協では328のこ〜ぷ委員会で、2,800人を超えるメンバーが「食」や「くらし」のなぜ?」などに応えるメンバー活動を行なっている。